

大学生の自己意識が文化的自己観に及ぼす影響

— 多変量解析による因果モデルの構築 —

The Effect of Self-Consciousness in University Students on Cultural Construal of Self
— Developing a Casual Model from Multivariate Analysis —

金子 智昭

(こども学科 助教)

要旨 本研究の目的は、大学生を対象に、改訂版自己意識尺度（金子，印刷中）を用いて、自己意識が文化的自己観に及ぼす影響性を明らかにすることであった。自己意識から文化的自己観へのパス図を作成し、共分散構造分析の多変量重回帰分析により、モデルの適合度を検証した。その結果、モデルの十分な適合度が得られ、(a) 私的自己意識は、相互独立性を促進する、(b) 公私自己意識は、相互協調性を促進する、(c) 行動スタイルへの意識は、相互独立性を抑制し、相互協調性を促進する、以上の3点が明らかとなった。行動スタイルへの意識が青年期に特有の自己観の形成を促進していること、また、2つの自己観を促進するためには私的自己意識と公私自己意識の両意識を高める必要があることが示唆された。

【キーワード：自己意識 文化的自己観 大学生 因果モデル 共分散構造分析】

I. はじめに

Markus & Kitayama (1991)¹⁾は、文化的自己観という概念を提唱した。文化的自己観とは、「ある文化において歴史的につくりだされ、暗黙のうちに共有されている人の主体の性質についての通念」(北山, 1998)²⁾である。文化的自己観は、「相互独立的自己観」(independence construal of self)と「相互協調的自己観」(interdependence construal of self)という2つの概念から構成される(Figure1)。相互独立的自己観は「個人の独自性や達成を重視し、社会的関係性を軽視する自己のあり方」であるのに対して、相互協調的自己観は「社会的関係性を重視し、個人の独自性や達成を軽視する自己のあり方」と定義される(APA, 2009)³⁾。文化的自己観に関する研究は、大きく、「比較文化」と「文化内比較」の2つに区分される(高田・大本・清家, 1996)⁴⁾。本研究の内容は、この2つのアプローチのうち、文化内比較の視点に立つものである。

第一に、比較文化の研究領域では、日本を含む東洋文化は、他者との関係性を基盤としているために相互協調的自己観が優勢であり、西洋・欧米文化は個の自立や主体性を重視するために相互独立的自己観が優勢であるという仮説を検証する

ことに重点を置いている(Markus & Kitayama, 1991; 北山, 1994; 北山・唐澤, 1995)¹⁾⁵⁾⁶⁾。実証研究として、日本人大学生は欧米諸国(オーストラリア, カナダ)の学生に比べて、相互協調性が高く相互独立性が低いことが示されており(高田, 1999)⁷⁾、相互独立的自己観と相互協調的自己観の文化差が確認されている。

第二に、文化内比較の研究領域では、人は相互独立的自己観と相互協調的自己観の両面を持っており、2つの自己観の相対的優位性によって、個人の自己観が規定されるという考え方を基盤としている(高田, 2011)⁸⁾。これら2つの自己観の個人差を測定する尺度も作成されており(高田, 1993, 1999, 2000; 高田ほか, 1996; 木内, 1995)⁹⁾⁷⁾¹⁰⁾⁴⁾¹¹⁾、これまで、自尊感情(高田, 2000)¹⁰⁾、心理ストレス(奥野・小林, 2007)¹²⁾、自己認識(高田, 2003)¹³⁾などの諸変数との関連が検討されている。これらの研究結果をまとめると、相互独立的自己観の高い者は、自尊感情や肯定的自己認識が高いのに対して、相互協調的自己観の高い者は、自尊感情が低く心理的ストレスや批判的自己認識が高いことが示されている。相互独立的自己観に比べて相互協調的自己観が優

勢の者は、自己主張をせずに周囲に合わせた態度をとろうとするためストレスを抱え込みやすいこと（奥野・小林，2007）¹²⁾、また、他者からの期待に添うための自己点検を怠らないために、他者の視線を敏感に感じ取り、自己批判的になりやすい（高田，2012）¹⁴⁾と考えられている。

文化的自己観の形成時期に関して、既述の「相互独立的自己観が低く相互協調的自己観が高い」という心理的不適応の状態を反映する自己像は、青年期に形成される傾向が強いことが示されている。すなわち、相互独立的自己観は、青年期(高校生、大学生)に低下し、成人期に上昇するが、相互協調的自己観は、青年期に上昇し、成人期に低下することが明らかとなっている（高田，1999，2001，2002）⁷⁾¹⁵⁾¹⁶⁾。

文化的自己観の規定因について、高田（2002）¹⁶⁾は、社会的比較の「他者志向比較」と「自己志向比較」の2つの概念に着目し、高校生・大学生において、他者志向比較は相互協調的自己観を促進する一方で、相互独立的自己観を抑制することを示している。その他、自己観を規定する要因として、Hattie（1992）¹⁷⁾は「自己意識」(self-consciousness)を挙げている。自己意識と文化的

自己観との関連について、これまで、私的自己意識は相互独立的自己観と正の相関（高田，2000）¹⁰⁾、公的自己意識は相互協調的自己観と正の相関（高田，2000，1999）¹⁰⁾⁷⁾が得られている。金子（印刷中）¹⁸⁾は、私的自己意識と公的自己意識の構成概念の細分化、および、公私自己意識の概念を新たに加えた「改訂版自己意識尺度」を作成した。本尺度は、「外見への意識」（自らの髪型や服装など外見への意識）、「公私自己意識」（他者への情緒的態度や社会的役割を重視し、自己を他者や周囲との関係性の中で捉えようとする意識）、「私的自己意識」（身体感覚・感情・動機・思考など自身の内的側面に対する意識）、「行動スタイルへの意識」（自らの言動や他者評価への意識）、以上の4下位尺度から構成される。

自己意識を多面的に捉えたうえで、自己意識と文化的自己観の関連性を明らかにすることは、青年期の自己形成のあり方を理解するうえで、より有益な知見が得られるものと考えられる。そこで本研究では、青年期後期の大学生を対象に、改訂版自己意識尺度を用いて、自己意識が文化的自己観に及ぼす影響性を明らかにすることを目的とする。

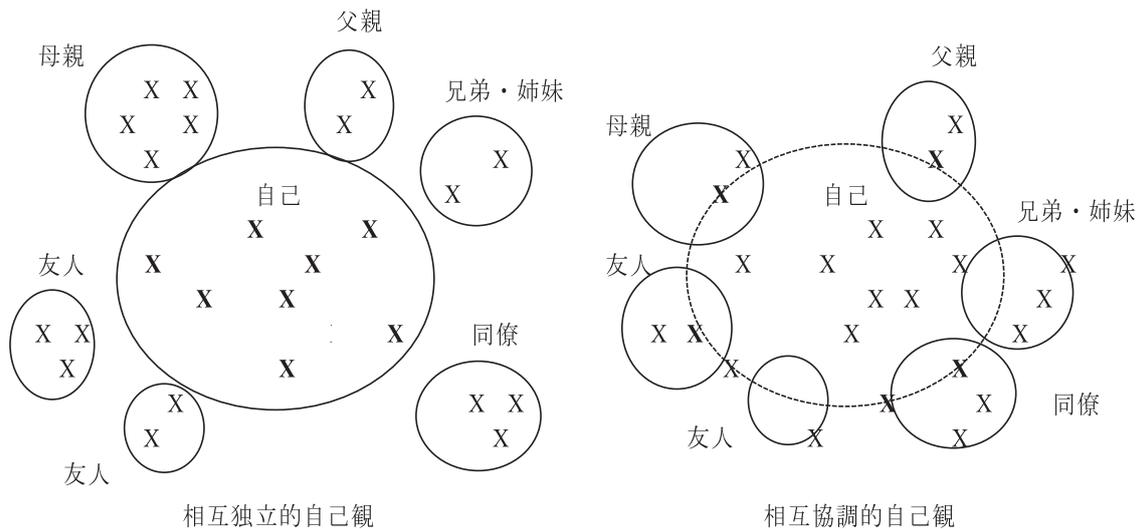


Figure1 文化的自己観の概念図（Markus&Kitayama，1991より作成）

II. 方法

1. 調査対象者及び手続き

埼玉県の私立A大学人間学部の学生310名と東京都の私立B大学教育学部の学生177名の計487名を対象に、2013年の6月から7月にかけて質問紙調査を行った。質問紙の回答に不備のあった者を除いた460名が最終的な分析対象となった (Table1)。有効回答率は、94.4%、平均年齢は、19.47歳 (SD = 1.28) であった。性別は、男性121名 (26.3%)、女性339名 (73.6%) であった。学年は、1年生164名 (男性43名、女性121名)、2年生168名 (男性31名、女性137名)、3年生62名 (男性20名、女性42名)、4年生66名 (男

性27名、女性39名) であった。

無記名の個人記入形式の質問紙を、大学の講義時間を活用して配布した。講義終了後、調査を実施し回収を行った。実施にあたり、(a) 回答は任意であること、(b) 回答内容はすべて集団データとして扱い、個人情報や回答内容が特定されたり外部に漏れたりすることがないこと、(c) 回答は正しい答えや間違った答えというものはなく成績とは一切関係ないこと、以上の3点を口頭および回答用紙への記載を通して説明し、倫理的配慮を行った。

Table1 分析対象者の学年と大学のクロス表

		大学		合計	
		A大学 (人間学部)	B大学 (教育学部)		
学年	1学年	人数	122人	42人	164人
		学年 (%)	(74.39%)	(25.60%)	(35.65%)
	2学年	人数	128人	40人	168人
		学年 (%)	(76.19%)	(23.80%)	(36.52%)
	3学年	人数	10人	52人	62人
		学年 (%)	(16.12%)	(83.87%)	(13.47%)
	4学年	人数	33人	33人	66人
		学年 (%)	(50.00%)	(50.00%)	(14.34%)
合計	人数	293人	167人	460人	
	学年 (%)	(63.69%)	(36.30%)	(100%)	

2. 調査内容

1) 改訂版自己意識尺度

改訂版自己意識尺度 (金子, 印刷中)¹⁸⁾ を用いた。尺度は、外見への意識8項目、公私自己意識10項目、私的自己意識6項目、行動スタイルへの意識5項目の4下位尺度、計29項目から構成される。教示文は、「次の各項目は、あなたにどの程度あてはまるでしょうか。最も近いものの番号をひとつ選んで、○で囲んでください。」とした。評定は、「あてはまる (5点)」「ややあてはまる (4点)」「どちらともいえない (3点)」「あまりあてはまらない (2点)」「あてはまらない (1点)」の5段階で回答を求めた。

2) 相互独立的一相互協調的自己観尺度

高田 (2000)¹⁰⁾ によって作成された相互独立的自己観と相互協調的自己観を測定する尺度を用いた。尺度は、相互独立性10項目、相互協調性10項目の2下位尺度、計20項目から構成される。また、相互独立性は、独断性6項目、個の認識・主張4項目の2下位尺度、同様に、相互協調性は、評価懸念4項目、他者への親和・順応6項目の2下位尺度としても構成されている。教示文は、「次の各項目はあなたにどの程度あてはまるでしょうか。最も近いものひとつに○をつけてください。」とした。評定は、「ぴったりあてはまる (7点)」「あてはまる (6点)」「ややあてはまる (5点)」「どちらともいえない (4点)」「あまりあてはまらない (3点)」「あてはまらない (2点)」「全くあてはまらない (1点)」の7段階で回答を求めた。

III. 結果

1. 自己意識と文化的自己観の相関関係

自己意識と文化的自己観の各下位尺度の得点は、各因子に付加する項目得点の総和を、項目数で除したものととして算出した。また、 α 係数を求めて、各下位尺度の信頼性を検討した。自己意識に関しては、外見への意識 ($M = 3.94, SD = .74, \alpha = .88$), 公私自己意識 ($M = 4.08, SD = .50, \alpha = .84$), 私的自己意識 ($M = 3.50, SD = .66, \alpha = .77$), 行動スタイルへの意識 ($M = 3.99, SD = .69, \alpha = .78$) であった。文化的自己観に関しては、相互独立性 ($M = 4.22, SD = .78, \alpha = .78$), 相互協調性 ($M = 5.25, SD = .79, \alpha = .79$), 個の認識・主張 ($M = 4.33, SD = 1.02, \alpha = .70$), 独断性 ($M = 4.23, SD = .78, \alpha = .71$), 他者への親和・順応 ($M = 4.95, SD = .82, \alpha = .62$), 評価懸念 ($M = 5.22, SD = .96, \alpha = .78$) であった。

次に、自己意識と相互独立性 (独断性, 個の認識・主張) および相互協調性 (評価懸念, 他者への親和・順応) の各要因間のピアソンの単相関係数および偏相関係数を求めた (Table2)。偏相関係数の値は、外見への意識, 公私自己意識, 私的自己意識, 行動スタイルへの意識, 各々の影響性を制御して求めた。外見への意識は、相互協調性と $r = .36$ ($p < .01$), 評価懸念と $r = .35$ ($p < .01$), 他者への

親和・順応と $r = .20$ ($p < .01$) の単相関, 独断性と $pr = .09$ ($p < .05$) の偏相関を示した。公私自己意識は、相互協調性と $r = .31$ ($p < .01$), 評価懸念と $r = .27$ ($p < .01$), 他者への親和・順応と $r = .26$ ($p < .01$) の単相関, 相互協調性と $pr = .11$ ($p < .05$), 他者への親和・順応と $pr = .15$ ($p < .01$) の偏相関を示した。私的自己意識は、相互独立性と $r = .23$ ($p < .01$), 独断性と $r = .17$ ($p < .01$), 個の認識・主張と $r = .21$ ($p < .01$), 相互協調性と $r = .19$ ($p < .01$), 評価懸念と $r = .18$ ($p < .01$), 他者への親和・順応と $r = .11$ ($p < .05$) の単相関, 相互独立性と $pr = .28$ ($p < .001$), 独断性と $pr = .22$ ($p < .001$), 個の認識・主張と $pr = .24$ ($p < .001$) の偏相関を示した。行動スタイルへの意識は、相互独立性と $r = -.20$ ($p < .01$), 独断性と $r = -.18$ ($p < .01$), 個の認識・主張と $r = -.14$ ($p < .01$), 相互協調性と $r = .68$ ($p < .01$), 評価懸念と $r = .70$ ($p < .01$), 他者への親和・順応と $r = .37$ ($p < .05$) の単相関, 相互独立性と $pr = -.30$ ($p < .001$), 独断性と $pr = -.26$ ($p < .001$), 個の認識・主張と $pr = -.21$ ($p < .001$), 相互協調性と $pr = .61$ ($p < .001$), 評価懸念と $pr = .64$ ($p < .001$), 他者への親和・順応と $pr = .29$ ($p < .001$) の偏相関を示した。

Table2 自己意識と相互独立性・相互協調性およびその下位尺度との単相関係数ならびに偏相関係数 ($N=460$)

	外見への意識		公私自己意識		私的自己意識		行動スタイルへの意識	
	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>
相互独立性	.00	.07	.05	.03	.23**	.28***	-.20**	-.30***
独断性	.01	.09*	.01	-.01	.17**	.22***	-.18**	-.26***
個の認識・主張	-.03	-.00	.07	.05	.21**	.24***	-.14**	-.21***
相互協調性	.36**	.04	.31**	.11*	.19**	-.03	.68**	.61***
評価懸念	.35**	.00	.27**	.04	.18**	-.04	.70**	.64***
他者への親和・順応	.20**	.05	.26**	.15**	.11*	-.03	.37**	.29***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注1) *r*は単相関係数を, *pr*は偏相関係数を示す。

注2) 改訂版自己意識尺度の下位尺度の偏相関係数は, 他の3因子の影響性を制御した値である。

2. 自己意識が文化的自己観に及ぼす影響性

自己意識の4つを独立変数, 相互独立性と相互協調性の2つを従属変数とした重回帰分析 (強制

投入法) を行った (Table3)。多重共線性の影響を検討するために, 独立変数のVIF (variance inflation factor) を求めたところ, 相互独立性を従属変数と

した場合に.103～.125, 相互協調性を従属変数とした場合に1.09～.135と低い値であり, 問題性はないと判断した。回帰分析の結果, 相互独立性の重相関係数は $R^2 = .14$ ($p < .001$), 相互協調性は $R^2 = .48$ ($p < .001$) で有意であった。相互独

立性の標準偏回帰係数は, 私的自己意識と $\beta = .30$ ($p < .001$), 行動スタイルへの意識と $\beta = -.34$ ($p < .001$)であった。相互協調性の標準偏回帰係数は, 公私自己意識と $\beta = .09$ ($p < .05$), 行動スタイルへの意識と $\beta = .64$ ($p < .001$)であった。

Table3 自己意識が相互独立性・相互協調性に及ぼす重回帰分析の結果

	相互独立性	相互協調性
外見への意識	.08	.04
公私自己意識	.03	.09*
私的自己意識	.30***	-.03
行動スタイルへの意識	-.34***	.64***
決定係数 (R^2)	.14***	.48***

* $p < .05$, *** $p < .001$

注) 数値 (β) は, 標準偏回帰係数を示す。

3. 自己意識が文化的自己観に及ぼす因果モデルの検証

自己意識が文化的自己観に及ぼす因果関係のモデルを, 共分散構造分析の多変量重回帰分析によって検証した (Figure2)。自己意識 (外見への意識, 公私自己意識, 私的自己意識, 行動スタイルへの意識) を独立変数, 文化的自己観 (相互独立性, 相互協調性) を従属変数に設定し, 重回帰分析で得られた結果 (Table3) に基づいてモデルを作成した。なお, 相互独立性と相互協調性との

間には有意な相関が得られなかったため, 誤差間の共分散は仮定しなかった。モデルの適合度は, $\chi^2 = 5.93$, $df = 5$, $GFI = .996$, $AGFI = .982$, $CFI = .999$, $RMSEA = .020$ であり, 十分な適合度を示した。公私自己意識から相互協調性へ正のパス ($\beta = .09$, $p < .01$), 私的自己意識から相互独立性へ正のパス ($\beta = .31$, $p < .001$), 行動スタイルへの意識から相互独立性へ負のパス ($\beta = -.29$, $p < .001$), 相互協調性へ正のパス ($\beta = .65$, $p < .001$) が得られた。

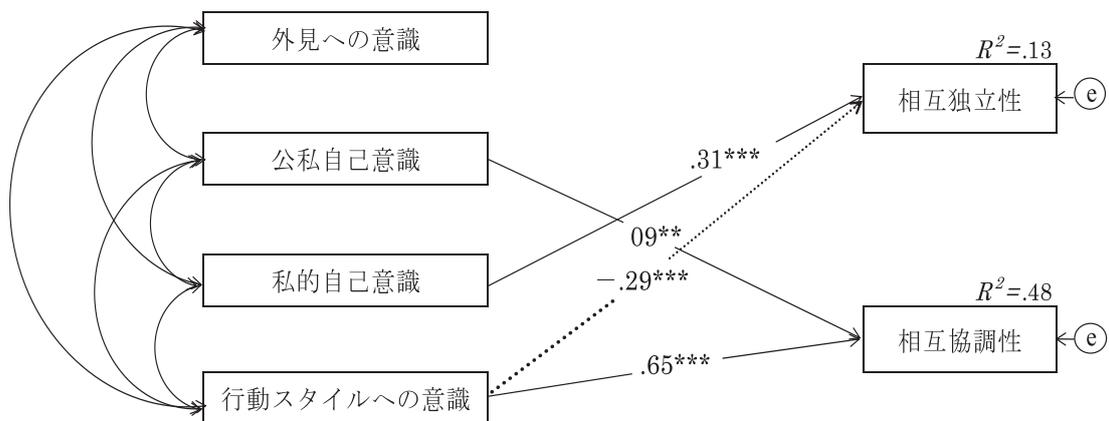


Figure2 自己意識から相互独立性・相互協調性への多変量重回帰モデル

GFI=.996 AGFI=.982 CFI=.999 RMSEA=.020

** $p < .01$, *** $p < .001$

注1) 実線は正のパスを, 点線は負のパスを示す。

注2) R^2 は決定係数, パスに隣接した値は標準偏回帰係数を示す。

IV. まとめと考察

本研究の目的は、青年期後期の大学生を対象に、改訂版自己意識尺度を用いて、自己意識が文化的自己観に及ぼす影響性を明らかにすることであった。

改訂版自己意識尺度(金子,印刷中)¹⁸⁾を用いて、自己意識と相互独立性および相互協調性との単相関係数および偏相関係数を求めた。私的自己意識は相互独立性と正の偏相関、行動スタイルへの意識は相互独立性と負の偏相関が示された。また、公私自己意識と行動スタイルへの意識は、相互協調性と正の偏相関が示された。外見への意識との関連性は、相互独立性と相互協調性のいずれの自己観においても関連性は認められなかった。次に、自己意識と相互独立性および相互協調性の各下位尺度との偏相関を求めたところ、外見への意識は、独断性のみと正の偏相関が示された。独断性とは、他者に注意を払うことなく、自分の判断に基づいて行動することである(高田ほか, 1996)⁴⁾。外見への意識が高い者は、注意獲得が高いことから(辻, 2005)¹⁹⁾、こうした他者から注目を得たいと欲する意識が、自己本位な行動へと駆り立てる可能性が示唆された。また、公私自己意識は、他者への親和・順応のみと正の偏相関が示された。他者への親和・順応とは、他者への同化を重んじる認識の傾向である(高田ほか, 1996)⁴⁾。公私自己意識の高い者は、他者との関係性の中で自己を意識するため、相手との心理的な一体感を求めようとする傾向が強いものと考えられる。私的自己意識は、独断性および個の認識・主張と正の偏相関があり、行動スタイルへの意識は、評価懸念および他者への親和・順応と正の偏相関があった。

次に、自己意識が文化的自己観へ与える影響性を検証するために、自己意識を独立変数、相互独立性と相互協調性の各々を従属変数とした、重回帰分析を行った。重回帰分析で得られた結果に基づき、自己意識が文化的自己観へ与える影響の因果モデルを作成し、モデルを共分散構造分析により検証したところ、十分な適合度が検証された。結果として、(a) 私的自己意識は、相互独立性を促進すること、(b) 公私自己意識は、相互協調性を促進すること、(c) 行動スタイルへの意識は、相互独立性を抑制し相互協調性を促進するこ

と、以上の3点が明らかとなった。その中でも特に、行動スタイルへの意識から相互協調性への影響力は、他の変数間の影響に比べて強かった。押見(1992)²⁰⁾によると、私的自己意識の高い者は、自分の気持ちに忠実で個性的であることを望み自己実現規準に従って行動すること、その一方で、公的自己意識が高い者は、他者と協調的であることを望み社会的受容規準に従って行動するとされる。私的自己意識の高い者は、周囲から独立した主体的な存在であろうとする傾向が強いため相互独立性の形成が促されるが、公私自己意識と行動スタイルへの意識の高い者は、他者と一体化した協調的存在であろうとする傾向が強いため相互協調性の形成が促されると考えられる。注目すべき結果として、行動スタイルへの意識は、相互協調性を促進する一方で、相互独立性を抑制するという点である。文化的自己観の観点では、青年期は相互独立性が低下する一方で、相互協調性は上昇することが指摘されている(高田, 1999, 2001, 2002)^{7) 15) 16)}。また、自己意識研究の観点では、青年期は他者からの評価に対する意識が高まる時期であるとも指摘されている(梶田, 1988)²¹⁾。これらの見解を総合すると、自らの言動や他者評価などの行動スタイルへの意識の高まりが、相互独立性が低下し相互協調性が向上するという青年期特有の自己観の形成を促進していると解釈できる。

相互独立的自己観と相互協調的自己観は、人間存在の2つの基本的様式である「個性的存在」と「社会的存在」に即した概念である(高田ほか, 1996)⁴⁾。従って、青年期の自己形成のあり方を捉えるうえで、相互独立的自己観と相互協調的自己観の2つの自己観は、片方として欠くことのできない重要な側面と考えられる。本研究結果(Figure2)に鑑みると、こうした2つの自己観を促進するためには、私的自己意識と公私自己意識の両意識を高める必要があるという示唆が得られた。本研究で得られた知見を教育的支援に生かすならば、他者からの評価意識に敏感な大学生に対して、自己の思考や感情など内面への気づきを促したり、他者との関係性や社会的役割など広い視野から自己を見つめる眼差しを養ったりする支援を展開することが、

青年期の自己形成の発達を促すうえで有用であろう。今後は、教育臨床的な視点から、自己意識や自己観を育むための教育支援プログラムの開発とその効果を検証していくことを課題とする。

謝辞

本調査にご協力頂きました学生の皆様方、また、本研究の執筆にあたり多くのご指導を賜りました早稲田大学の河村茂雄教授、青山学院大学の早坂方志教授、あやめ研究会のメンバーの方々に対しまして、心より感謝の意を申し上げます。

引用文献

- 1) Markus, H.R., & Kitayama, S. Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*. 1991, 98, 224-253.
- 2) 北山忍. 自己と感情—文化心理学による問いかけ—. 共立出版, 1998.
- 3) VandenBos, G.R. *APA Concise Dictionary of Psychology*. American Psychological Association, 2009.
- 4) 高田利武・大本美千恵・清家美紀. 相互独立的—相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成. *奈良大学紀要*. 1996, 24, 157-173.
- 5) 北山忍. 文化的自己観と心理的プロセス. *社会心理学研究*. 1994, 10, 153-167.
- 6) 北山忍・唐澤真弓. 自己：文化心理学的視座. *実験社会心理学研究*. 1995, 35, 133-163.
- 7) 高田利武. 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討. *教育心理学研究*. 1999, 47, 480-489.
- 8) 高田利武. 新版 他者と比べる自分 社会的比較の心理学. サイエンス社, 2011.
- 9) 高田利武. 青年の自己概念形成と社会的比較—日本人大学生にみられる特徴. *教育心理学研究*. 1993, 41, 339-348.
- 10) 高田利武. 相互独立的—相互協調的自己観尺度に就いて. *奈良大学総合研究科所報*. 2000, 8, 145-163.
- 11) 木内亜紀. 独立・相互依存的自己理解尺度の

作成および信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*. 1995, 66, 100-106.

- 12) 奥野誠一・小林正幸. 中学生の心理ストレスと相互独立性・相互協調性との関連. *教育心理学研究*. 2007, 55, 550-559.
- 13) 高田利武. 日本人成人の相互独立性—クラスター分析による類型的理解の試み—. *奈良大学紀要*. 2003, 31, 213-233.
- 14) 高田利武. 日本文化での人格形成—相互独立性・相互協調性の発達の検討. ナカニシヤ出版, 2012.
- 15) 高田利武. 自己認識手段と文化的自己観—横断的資料による発達の検討—. *心理学研究*. 2001, 72, 378-386.
- 16) 高田利武. 社会的比較による文化的自己観の内面化—横断資料に基づく発達の研究—*教育心理学研究*. 2002, 50, 465-475.
- 17) Hattie, J. *Self-concept*. Hillsdale NJ : Erlbaum, 1992.
- 18) 金子智昭. 大学生の自己意識に関する研究—改訂版自己意識尺度の作成と心理的適応の関連性—. *慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要『人間と社会の探求』*. 印刷中, 84.
- 19) 辻平治郎. 森田療法における自己意識・自己内省の概念と測定. 梶田叡一編. *自己意識研究の現在2*. ナカニシヤ出版. 2005, pp.119-134.
- 20) 押見輝男. 自分を見つめる自分 自己フォーカスの社会心理学. サイエンス社, 1992.
- 21) 梶田叡一. *自己意識の心理学* (第2版). 東京大学出版, 1988.

資料

1.改訂版自己意識尺度の項目内容

- 1) 外見への意識 (8項目)
 - ・髪型を気にする
 - ・自分の外見を意識する
 - ・自分の体型やスタイルを意識する
 - ・自分の容姿に気をくばる
 - ・自分の理想の体形やスタイルについて考える
 - ・出かける前に、自分の服装を鏡で見る
 - ・自分に似合うオシャレを意識する
 - ・自分の顔立ちや目鼻立ちには、あまり関心がない (※逆転項目)

2) 公私自己意識 (10項目)

- ・相手を不快にさせないような接し方を考える
- ・初対面の人に対して、失礼がないように気をつかう
- ・社会一般の常識に従って、行動しようとする
- ・目上の人に対して、言葉づかいに気をつける
- ・相手の気持ちを察して、それに沿おうとする
- ・相手の意向も考慮しながら、物事を判断しようとする
- ・みっともない行動は、慎むように意識する
- ・任される仕事に対して、責任を果たすことを意識する
- ・相手の状況に配慮した振る舞い方を考える
- ・人のプライバシーや権利を守ることを意識する

3) 私的自己意識 (6項目)

- ・今ここでの感情の変化に注意を向ける
- ・自分の行動特徴について、深く分析する
- ・日ごろ、自分自身を理解しようと努めている
- ・自分が認識する物事の本質や意味について、じっくり考える
- ・その時々のお気持ちの動きを感じ取る
- ・自分がどんな人間か、過去の行動をもとに熟考する

4) 行動スタイルへの意識 (5項目)

- ・人から、自分がどのように思われているのか意識する
- ・自分についての噂に関心がある
- ・人からの評価は、あまり意識しない(※逆転項目)
- ・自分の振る舞いが、人からどのように見られているか意識する
- ・自分の言動について、何度も反省する

2. 相互独立的-相互協調的自己観尺度の項目内容

1) 相互独立性 (10項目)

独断性 (6項目)

- ・自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じる場所を守り通す
- ・一番最良の決断は自分自身で考えたものであると思う
- ・自分でいいと思うのなら、他の人が自分の

考えを何と思おうと気にしない

- ・たいていは自分一人で物事の決断をする
- ・良いか悪いかは、自分自身がそれをどう考えるかで決まらと思う
- ・自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない

個の認識・主張 (4項目)

- ・自分が何をしたいのか常に分かっている
- ・自分の意見をいつもはっきり言う
- ・いつも自信をもって発言し、行動している
- ・常に自分自身の意見を持つようにしている

2) 相互協調性 (10項目)

評価懸念 (4項目)

- ・相手は自分のことをどう評価しているか、他人の視線が気になる
- ・人が自分をどう思っているかを気にする
- ・他人と接するとき、自分と相手との間の関係や地位が気になる
- ・何か行動をするとき、結果を予測して不安になり、なかなか実行に移せないことがある

他者への親和・順応 (6項目)

- ・人から好かれることは自分にとって大切である
- ・相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある
- ・自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける
- ・人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い
- ・仲間の中での和を維持することは大切だと思う
- ・自分がどう感じるか、自分が一緒にいる人や自分のいる状況によって決まる